

モザンビークにおける JICA 海外協力隊の活動の検証と一考察

—芸術的思考による国際協力活動—

Verification and consideration of the activities of JICA Overseas Cooperation Volunteers in Mozambique
-International cooperation activities based on artistic thinking-

石田恒平 Kouhei Ishida

東京造形大学大学院 造形研究科 造形専攻 造形教育研究領域
修士論文制作 261 ページ, 23 万字

1. 研究の背景と目的

筆者は大学卒業後、2009年4月～2022年3月までの13年間、東京都武蔵野市にある中学・高等学校で美術教育の現場に携わってきた。現職で JICA 海外協力隊(2017年10月～2019年10月)に参加し、アフリカのモザンビーク共和国(以下モザンビーク)で美術教育の国際協力現場体験が研究の動機として深く関わっている。日本とモザンビークの美術教育の現場に携わってきた経験から本研究の必要性を感じ、国際協力における美術教育との関りについて興味関心を抱き、研究を行うきっかけとなった。

モザンビークの美術教育、国際協力の視点から現地に受け入れられ、持続可能に引き継がれるための活動におけるアプローチの仕方や技術移転に至る要因について分析し考察を行い、モザンビークで派遣される協力隊員の今後の手立てになるような知見を見出し、出すことが本研究の目的である。

研究の成果として、国際協力活動において、協働性やクリエイティブ性を生むことにより、現地の人たちの協力や理解を深め、円滑な活動につなげていきたいという思いがある。

本研究における国際協力活動による芸術的思考とは、芸術の中だけで定義づけるものではなく、現地との関りの中で協働しながら、創造的活動を生み出す思考のことであり、協働性やクリエイティブティ・エンパワメント・価値観の転換を生み出すための物ごとの考え方である。美術を職種とした派遣に関わらず、また、美術教育に関する技能・技術・学習を学んでいない人でも国際協力活動において芸術的思考を取り入れることによって誰もが行うことのできるサイクル構造を構築し、芸術的思考による国際協力活動を行うことで、周囲の意識の転換やイノベーション、エンパワメントなどの相手の意識の変容を促し、最終的には技術移転につながる要因を生むのではないかと仮説を本論で検証していくことが目的である。

2. 研究方法と研究範囲

本研究の主題は、「モザンビークにおける JICA 海外協力隊の活動の検証と一考察」、副題は「芸術的思考による国際協力活動」である。従って、最終的な研究の目標は芸術的思考による新たな視点での国際協力活動の可能性を導き出すことにある。そのため、研究を進めるにあたって、以下の範囲を研究対象とした。

本研究においてはモザンビークにおける JICA 海外協力隊員 327 名の報告書を対象とする。2年間の派遣期間の中で、1～5号までのボランティア活動報告書を量的・質的の両面のアプローチで研究を行い、芸術的思考による国際協力活動にあたる事例を抽出し、分析考察を加えるものとする。

ボランティア活動報告書の文献調査を中心として研究を行うが、協力隊員による2年間の活動を通じて、報告書では得ることのできない事象等の確認の目的で、協力隊員 OBOG22 名、現役 10 名による質問紙調査及び 9 名からの聞き取り調査を実施した。

また、次のような方法によって研究を進め、成果を提示する。

- ・モザンビークでの現地調査を経て、現地での視察や関係者への聞き取りを行い、分析考察を通して、国際協力活動の現状や技術移転に至る要因について明らかにする。
- ・モザンビークでの現地調査及び実践活動を通じて得られた事象や浮かび上がってきた要因を分析考察し、芸術的思考による国際協力の実際の効果や課題について考察する。
- ・以上のような文献調査、聞き取り調査、現地調査及び現地での活動を通じて、芸術的思考に関する基礎的研究の考察を踏まえ、技術移転を目的とした芸術的思考による国際協力活動の関係性について明らかにし、今後の可能性を提案する。

3. 結果及び考察

モザンビークに派遣された協力隊 OBOG 327 名分の報告書を分析した結果、美術派遣意外にも分野や職種を問わず、芸術的思考を取り入れた活動を行っている隊員が 95 名、全体の 41%いたことが浮かび上がってきた。

現地の人たちとの関りの中で、寄り添う視点として、その地に根づく文化や伝統、人々の興味関心や願い、思い、ニーズ、課題や問題意識に目を向けることの重要性が必要不可欠であり、芸術的思考のサイクル構造を用いることで、協働性や価値観の転換、クリエイティブティ、エンパワメント、さらには創造的活動を生み出すことにつながりやすい要因として効果が高いということが証明された。現地の人たちが達成感を味わうことで、主体的な活動へつなげていくことが重要な要素であると考えられ、創造的活動を生み出していくことが最終的に技術移転に至る要因の一つであると思われる。

芸術的思考による国際協力活動は技術や技能の伝授ではなく、現地の人たちと共に課題を見出し、問題解決に向けて取り組み、創造的活動につなげていくためのアプローチであり、最終的に技術移転につなげていくための一つの提案として有効性が高いと思われる。筆者自身の活動を振り返るとともに、2023年8月に行った現地調査や現地での実施活動を通じて、芸術的思考を国際協力活動に取り入れることで、技術移転につながりやすい一つの要因が明らかとなったことは意義あるものと考えている。国際協力活動における様々な分野や職種にも通用するような一つのモデルケースとして提示できるのではないかと考えられる。